みやぎ・せんだい協働教育基盤による
地域高度人材の育成

「FD/SD 研修受講者を対象とした実践状況調査（報告）」

～これまでに、のべ 1,600 名以上が研修を受講し、
参加するすべての高等教育機関に地域協働教育コーディネーターを養成～

FD/SD 部 会

2019 年 7 月 2 日

FD/SD 研修受講者を対象とした実践状況調査（報告）

～これまでに、のべ 1,600 名以上が研修を受講し、
参加するすべての高等教育機関に地域協働教育コーディネーターを養成～

１．はじめに

「みやぎ・せんだい協働教育基盤による地域高度人材の育成」事業では、地域経済に新たな活力を与える企業の担い手たる人材（地域高度人材）の育成及び地域企業の魅力向上を支援し、宮城県の地方創生に貢献することを目指している。特に高等教育機関においては、自ら仮説を設定し、試行錯誤を繰り返しながらより適切な解を導き出すことを地域のビジネスの現場で実践できる人材の育成が必要である。

一方、本事業が目指す人材育成を実現するためには、地域企業と学生の成長の両方を実現しうるプログラムを設計･実施できる教職員の育成･配置が重要となる。そのため、本事業に FD/SD 部会を設置し、事業協働機関内での本事業で実施している教育プログラム設計・実施内容の共有とノウハウ移転に取り組んできた。

具体的には、事業期間初期は、本事業の周知と理解を促すことを目的とした各大学等での FD/SD 研修、次に本事業の教育プログラムの核となるディープ・アクティブラーニングの手法を各大学等の既存科目に導入することを目指したハンズオン型の研修、さらに大学等が合同で開催する地域協働教育コーディネーター養成研修を企画･実施した。開催回数及び参加人数は、これまでに 63 回、のべ 1,600 名以上となっている。

また、FD/SD 部会では、本事業の継続性を担保する観点から、上述の研修受講者のうち一定レベルを満たした者を「地域協働教育コーディネーター」として認定することを決定した。認定基準は、「研修に参加して内容を理解した」ことを基準とした「導入」レベル及び「研修で学んだことを実践した」ことを基準とした「実践」レベルとした。

養成研修の受講者には、研修終了時に FD/SD 研修の効果検証を目的としたアンケート調査を実施し、研修終了時点における研修で学んだ内容についての理解度や受講者自身の実践希望度を調査した。その結果、これまでの研修受講後アンケート提出者 277 名のうち 178 名が「導入」レベルで認定という状況となり、「導入」レベルにおいては、本事業に参加するすべての高等教育機関に FD/SD 部会が認定する地域協働教育コーディネーターを養成するに至った。しかし、本部会の目的である教育プログラム設計・実施内容の共有とノウハウ移転については、受講者が研修内容を実際に活用したか否か、また、活用した場合、具体的にどのようなことを実践したのかを把握できていなかった。

この状況について、FD/SD 部会であらためて協議した結果、今回、上述の研修終了時点のアンケートで研修内容の実践を希望した受講者が所属機関における講義や業務等において、研修内容の活用の有無、また、活用した場合はどのような内容であったのかを把握する調査を追加で行うこととした。

本報告は、これら研修終了時点及び一定期間経過後のアンケート調査から FD/SD 研修の効果測定を行うとともに、一つのエヴィデンスとして取りまとめたものである。

２．目的

FD/SD 研修における「地域協働教育コーディネーター」の養成状況について効果測定を行い、本事業における FD/SD 活動の推進状況を明らかにする。

３．調査期間

2018 年 9 月 28 日（金）から 10 月 26 日（金）まで

４．調査対象

本事業で開催した FD/SD 研修を受講し、かつアンケートにおいて研修内容を「取り入れたい・実践したい」「課題をクリアできれば取り入れたい・実践したい」と回答した受講者（151 名）を対象とした。

なお、本事業の期間が限られているため、これまで一度もアンケートの回答が無かった受講者、アンケートにおいて研修内容を「取り入れない・実践しない」と回答した受講者は、今回の調査の対象外とした。

５．調査方法

４.調査対象に基づき、対象となった受講者に対して、アンケート調査用紙を配付し、書面で回答する方法とした。なお、調査の流れは以下のとおりである。

（１）地域協働教育推進機構事務局は、対象者毎に個別の参加状況をまとめたアンケート調査用紙を各大学等事務局に郵送する。

（２）各大学等事務局は、当該教職員にアンケート調査用紙を配布し、当該教職員から記入済アンケート調査用紙を回収する。

（３）各大学等事務局は、回収したアンケート調査用紙を地域協働教育推進機構事務局に送付する。

６．回収状況

調査票配付数：151 名　　調査票回収数：114 名　　回答率：75%（114 名／151 名）

※参考　研修受講後アンケート提出者：277 名（のべ提出者：401 名）

７．調査結果について

アンケート回答者のうち、「取り入れた・実践した」と回答した教職員が 24 名（回収数に対し 21%）おり、FD/SD 部会が認定する「実践」レベルに達した。また、「まだ取り入れて（実践して）いないが、後期から来年度に向けて取り入れたい・実践したい」と回答した教職員が 62 名（回収数に対し 54%）おり、合わせると 86 名（回収数に対し 75%）が「実践」レベルに達している、もしくは非常に近づいている状況にある。

８．別添資料

・調査結果及び養成状況（詳細）　…別添１

・調査票見本（実践状況調査、FD/SD 研修アンケート）　…別添２

・COC+事業 FD/SD 研修一覧（2018 年度まで）　…別添３

以　上

別添１

調査結果及び養成状況（詳細）

Ⅰ.今回の調査結果（配布数：151／回答数：114／回答率：75%）

１．COC+事業 FD/SD 研修受講後に、研修で得た内容を、授業や業務等に取り入れ（実践し）ましたか。

（N=114）

- 取り入れた・実践した ..... 24 票（21%）
- まだ取り入れて（実践して）いないが、後期から来年度に向けて
  取り入れたい・実践したい ..... 62 票（54%）
- 今後、取り入れる（実践する）予定はない ..... 28 票（25%）

２．上の質問で「取り入れた・実践した」と回答された方に伺います。
具体的には、どのような内容を取り入れ（実践し）ましたか。（N=24）

- 研修 No.7 のディープ・アクティブラーニングの考え方を授業に取り入れた（デザインセミナーⅠ.Ⅱ、クリエイティブデザイン研修Ⅰ・Ⅱ）。
- デザイン分野の学習、特に実習は「デザイン対象の選定・調査・課題の解決・解決策の検証」のプロセスを経ます。特に対象の調査を繰り返すことで深い理解につながっていると思います。
- 既にシラバスにより運用されている既存の課題には限界があると考え、夏期休みの自由課題に公開コンペへの応募を促した。FSC 認証材を使った木のコンペがあり、課題発見と着眼点についてコメントし、自主的な取組みを促した。問われればヒントを与えるという形式で結果として自主的に学んだ学生が評価される結果を得た。
- No.8　職員が教学マネジメントにおいて当事者意識をもって取り組むべきこと。良い意味での批判的思考力を持って IR を行っている。
- 学校設定科目「プレカレッジ」の授業にディープ・アクティブラーニングの考え方を取り入れ、現在生徒一人一人の学びの質の向上の力添えを行うとともに同僚と力添えの方法について議論と改善を行っている。
- 地域企業や地域住民を対象としたフィールド体験型の授業を行うことが多くあるが、少人数を対象（学生）にするか、教育する側を多くしないと、深い学びになりにくく、その際の大学側の柔軟な対処も必要だと考える（交通など地域に出ること、引率教員または職員など）。
- 学科の新カリキュラムにおける地域関連科目の導入科目「地域創生論」において、研修の考え方を取り入れて、内容（シラバス）を検討し、評価の仕方を検討し、実施した。
- 研修 No.7 のディープ・アクティブラーニングの考え方を前期担当科目の「生徒・進路指導」に取り入れ、生徒指導上の課題について、グループ発表（プレゼンテーション）を実施した。後期担当科目「特別活動の指導」においては、課題発見からの取り組みを予定している。
- 研修 No.3 学生の主体的な学びを促進するためには-COC+事業の活用を例として
  「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」という科目のゼミ活動の一環として国際交流、異文化理解、グローバル人材養成という３つの観点から、（公財）仙台観光国際協会主催の「地球フェスタ」に 2017 年及び 2018 年９月の２回、ゼミ生を参加させ外国人との交流や各国ブースの方々と主体的に交流をさせる取り組みを行った。また、2018 年９月下旬仙台市内で開催された宮城県・仙台市、宮城県台湾同郷会後援の「リトル台湾 in 仙台」にもゼミ生を参加させ、在仙の外国人と交流をする主体的な学びを実践した。

● 英語を担当しているが、１つ１つの語彙の発音の仕方を理解し、発音する訓練が、遠回りに見えるが、結果としてスピーキングはもちろん、リーディングやリスニング、ライティングのすべてのスキルにおいて、学生の理解力や運用力を伸ばすと感じている。

音声をキーに、音と他のスキルが学生の頭の中で有機的につながることで、１つの学びが他のフィールドに応用されるという点では、一種のアクティブ・ラーニングといえるのかもしれない。

● すぐにまとめやフィード・バックが必要とのことであったので、授業後にその日のまとめや小テストを行うようにした。

● フォーマットや手法について取り入れたり実践できたわけではないが、ボランティアに参加する学生が、復興や活動について考える際に様々な側面を考えてみるようにした。学習会においても、Input だけでなく、対話や内省の機会を増やし、地域課題をもう一歩深く考えられるような働きかけにつとめた。

● 本大学の大学院では、当該分野の高度な専門指導者の養成を行っている。その達成のため、キャリア教育を重視した教育にも力を入れている。DAL は大変有効な手法に１つと考えているため、H30 年度、担当する「スポーツ科学概論」および「スポーツ科学指導研究」の一部に DAL を採用して実施している。

● 授業の中で課題発見させるため、グループワークを取り入れ、議論、発表してもらった。また、事案を提示し、それについて自分がどのように思うのかをまとめさせ、友人どうしで話を（ピアレビュー）をさせた。

● 当方は、研修 No.1、12.5-5,5-8 に参加した。参加の理由は、当方が担当する授業の一環で研修 No.5-8 を実施することとなったため、その準備、ならびに研修内容の今後の授業での活用、改善について学ぶためである。

研修 No.1 では、アクティブラーニング形式の授業の形態や展開についての解説があった。また、グループワークで授業の展開についての意見交換が行われた。グループワークを通じて、学生がアクティブラーニング形式での授業で議論する内容について考えることができた。その点を、研修 No.5-8 の準備に活用できたと思う。

研修 No.5-8 の実施については、２回の授業であったが、学ぶことが多かった。特に学生からのミニットペーパーをメールで提出する点、ミニットペーパーの内容について次の授業までに返答する件については、初めての経験であったため不慣れな点、大変に感じる点もあったが、学生にとっては自分が提出した内容に教員からの意見が早い時期に届くこともあり、有益であったと感じた。

研修 No.5-5,12 については、同じ職場で研修 No.5-8 以降に実施されたものである。当方の今後の授業に生かせる点を学ぶために参加した。

研修 No.5-5 では、当方が行ったディープアクティブラーニング形式の授業であったが、学生のプレゼン後に、参観した教員から意見を付箋で回収（提出）する点が参考になった。

研修 No.12 では、他大学の学生と共に学ぶ環境、ならびにプレゼン会場が仙台メディアテーク 1F というオープンスペースでの実施という点が参考になった。前者については、他大学かつ専攻の違う学生と同じ学習時間を共有することが学生への刺激となること、後者ではオープンスペースという特別な環境での学習が学生にもよい刺激（影響）になることを感じた。

● ハンズオンの際に用いられたツールを参考に学生が学びを振り返ることができるように工夫した
授業の際に用いるトピックの改善に研修で学んだ内容を反映した等々、様々な参考にさせていただきました。

● 生活美術学科一年次の授業（スタディスキルズ）の担任指導の時間に３企業をお呼びし、学生が職業についての理解を深め、「地元で働く意義」「地元産業の魅力」を知る機会として捉えてもらうことを目的に仙台市産業振興事業団の産業創造部雇用支援課の協力のもと地元企業経営者・人事担当者から直接、話を聞く場を設定した。職業理解に関する座学、３回転による車座トーク、ジョブ・トライアル（インターンシップ事業）についての説明をしていただいた。

　また、学生には事前に企業理解ということで、３企業についての下調べをさせ、質問を考えて来るようにと指導し、後日、レポートを提出させた。

　来年度のインターンシップに向けては、雇用支援課と検討中である。

● 平成 29 年度 12 月 25 日・26 日の研修に参加しました。(「キャラクターのデザイン・プロデュースワークショップ」佐藤寛和先生)

　私は副手なので、授業を行う立場ではないので、授業に取り入れることはできないのですが、業務の中で行事に関わる広報物、キャラクターを作成することがあります。今回研修に参加し、キャラクターを考える際のポイント・アイディア等を学びました。その考え方を取り入れ、平成 29 年度からはじまったイベントのキャラクターをアレンジし、平成 30 年度のイベントで配布する BOX ティッシュ等を作成しました。

● No.2、No.5-2

・３、４年生のゼミで参考にさせてもらった。

・リエゾン・アクションセンターでの学生の自主活動の計画・実施・評価に活用させていただいた。

● 業務に活用する機会にはあまりめぐまれなかったが、SD 研修等のワークショップにおいて、今回得た内容（考え方）を活用し、取り組むことができた。

● 本年度公務員対策講座でディープ・アクティブラーニングの考え方を授業に取り入れて、人口減少問題、災害対策について行っているが、中々学生のレベルがあわず難しいものがある＜No.5＞。

● No.1 および No.6 の内容にもとづき、自身の授業においてグループワークをとり入れた。今後もアクティブラーニングを進めようと考えている。

● 解のない（あるいは数多くある）問いに対して主体的に学ぶこと、また、フィードバックのやりとり重視などで学ぶことができたので、卒業研究において、例年以上に問題の追及やフィードバックの回数・タイミングを意識して授業を実施した。

● 地域の課題Ⅰで扱った、視点→現状分析→将来像の設定→課題抽出→アクションプランの作成という授業設計を取り入れ、SDGs を視点とした課題解決の授業を後期から実施する予定です。

「取り入れた・実践した」と回答以外の方からのコメント（N=7）

● ディープ・アクティブラーニングで学んだ事は、授業に取り入れ、実践可能であれば、学生の学習意欲を高める事が出来ると考えている。しかし、どのように自分の授業に取り入れるかをまだしっかりとイメージできていないので今後それぞれの授業の中でどのように取り入れるかしっかり考えていきたい。

● No.12 のデザイン思考の考え方を授業に取り入れ、１年生の総合科目においてものづくりによる課題解決を実施予定。

● No.5-6　自身のもつ授業に PBL 型の授業があり、今年度の授業の中に少しでもエッセンスをとり入れたいと思っている。評価方法について検討する必要がある。(No.5-8　一部のみの参加であった)

● 参考になることが多い研修会であったが、厚生労働省カリキュラムの中でも特に自由度の低い基礎科目を担当しているため、授業に反映させられる見込みは今の所ない。アクティブラーニングについてはすでに取り組んでいるが、その中に研修で得た考え方を反映させて試験や調査学習などをとり入れている。

● 研修No.9　大学と地域・企業をつなぐ連携の意味と可能性　１．取り入れたい、実践したい。

　地域からの要請により、地域の活性化に向けた事業が立ち上がった。その事業において、対象者から事前調査を行い、地域の基本情報の確認を行うとともに、協働する本学教員にはヒアリング項目の設定を依頼し、そのヒアリング項目をもとに学生には「学びの場」として地域の現状や、組織体制の現状を検証するための聞き取り調査をおこなってもらっている。この後、ヒアリングの情報から中期目標なるものを設定し、その目標に対する課題の洗い出し、仮設・検証のサイクルを何度か行うことになるが、地域へは、計画の実行主体であることの意識付けをし、教育面においては、教員のサポートや学生の学習環境の保全という観点でフォローしていきたいと考えている。

● 本年度から新たな方法で学生実験を行っている。今年度は、終盤に学生自身が何が出来るようになったと認識しているかを調べ、それを評価指標に対応づけて、今後はフレームワークの提示や事前・事後の学生自己評価に用いていきたい。(No.7、10それぞれ評価やふり返りに関して参考にさせて頂いた)

● 後期からの指標運用試行に際して、研修11，13を受け、学生にどのように働きかけたらよいのかのヒントをいただきました。

　現在、形成的評価を実施しようとしています。ただし、個別の評価のフィードバックの実施は検討中です。集団へのフィードバックは強化しつつあります。

　今思えば、研修5-10で、実際の授業を体験させていただいて、形成的評価において評価コメントを返すのを少し経験させていただいたことも勉強になりました。ただし、毎回の評価について一貫した評価コメントを多数の学生に返すには、それなりの準備と経験が必要と感じました。

３．その他ご意見等あれば記入してください。（N=48）

＜活用に関する意見＞

● No.13の研修で「評価と検証」のセクションの連想後の変化の分析に倣って震災と復興の授業内でのコンセプトマップの変化（初回と最終回）の分析をしてみたいと思う。

● 研修会の話題を小学生の子供の自主学習問題に利用させていただきました。大学生向けの話題と設問のため小学生向けに変更し、アクティブラーニングをとり入れる練習をさせていただきました。そこでのやりとりを基にもりまちCOALの活動支援に応用させていただいています。考えを深掘りする方法がとてもためになりました。ありがとうございます。

● 現在、就職キャリア支援業務から、研究支援（外部資金、競争的資金）の業務の部門に変わり、対学生（就職)、企業から対職員（研究)、企業に対する業務を行っている。この中で企業との連携がますます重要となり、大学の研究成果が産業界において具体化、実用化され将来の利益（大学、地域、企業）に結びつけられたらと思います。

● 大学と地域との連携がさけばれているなかで、地域の財産等を活用し、学生へのインターンシップ、就職へとつなげていきたい。

● 研修を受けた内容では、授業の最後に意見をまとめる形ではなかったので、その点を変更した形で今後実践してみたいと考えています。

- ディープ･アクティブラーニングそのもの、あるいはそれに準じたものを行うべきという思いはあるが、大学の状況を考えると、なかなか難しいものであると感じる。現行のように、短期で、派遣する形で学生がディープ・アクティブラーニングを体感できると良いのではないか。
- 業務上、特に関係するのが CSW スキルアッププログラムだが、今年度で３回目となる。今回の研修で確認できたのは①講座、②研究会、③活用現場の関係性（重要性）である。事務担当者として、講師、受講生とともにより、社会に評価されるものにしなければならないと感じた。
- 近年、小学校から大学まで「班で話し合ってみましょう」という時間が多いことに疑問も持っておりましたが、今回の研修は、受講者一人一人が頭や体を動かして有意義な学習となるような課題の立て方、展開方法、評価などについて、大変参考になりました。
- 完全に取り入れることは難しいが、一部だけ考え方を取り入れ「授業中に学生同士で話合いをする」等はできそうだと思います。
- いつもお世話になっています。「地域高度人材」を育てる特別な科目があるような認識の方もいらっしゃるかもしれないが、大学で学生を地域高度人材に近づけるために、何を意識して何を行うことが効果的なのかについてのプロジェクトというように理解がひろがると、この事業の成果を大学でのご自身の授業にとりいれてみようというような意識が少しは高まるのではないかと思いました。指標は。高大接続答申の学力の三要素ともかかわりが深いと思いますし、社会でも活用されうるものであれとなれば。さらに意義があると考えています。
- 現在、また、今後行われるカリキュラムの中で、ディープアクティブラーニングの進め方を参考とした組み立てがあると良いと考えている。
- 研修を受けたからということではなく、専門分野（建築）においてはディープでアクティヴなデザイン実践教育を行ってきている。課題もあるのでその課題発見に活かすことはありえる。
- １年も前のことなので、具体を忘れてしまいました。申し訳ありません。ディープ・アクティブラーニングは、そう言われる前から、演習・実習で学生主体の授業をいつも考えてきていたので、実践する努力はしてきたと思っています。
- 研修 NO5-5、5-8 に参加させていただいた。
  私自身は講義する立場にはいませんが､講義担当教員と討論するための材料が得られたように思います。アクティブラーニングと一言で言っても講義内容や対象者に応じた様々なやり方があること、受講者の思考を喚起させる様々な工夫が必要なことが示されたように思います。
  　新任教員研修のような場でアクティブラーニングのモデル授業を実施できると良いのですが。COC+がきっかけになってくれると良いですね。
- フードエンタテイメント演習は後期の授業なので、これから昨年の授業を参考にしたものを実践予定。（地域栄養活動演習は大学の授業（短大でない）と思われます、が内容（方法）は参考にする予定)。
- 免許・資格の科目が主なのでむずかしい面もあるが、取り入れるよう努力したい。研修会は大いに参考になった。
- 本年度、担当学生（社会福祉士受験者）以外の基礎科目を１つ持つことになったので、後期科目でとり入れられそうなことについて、やってみる予定である。しかし他専攻学生であり、あまりこちらが熱心にとりくんでも学生の負担が増すだけだと思うので、限界がある。はっきりいって学生にどこまで負荷をかけていいのかがわからないままに主体的な学習をとこまで促せばいいのかが、新任教員としては全くわからない。

- 既存シラバスによる単位認定に直結する課題の評価との関係、自主的な学習姿勢を評価する方法の確立。
- 具体的に決まっておりませんが、今後取り入れていきたいと考えております。
- 私が担当している授業の範囲では研修内容を実際学生に直接役立てるのはあまりできないが、多角的な観点からの考察やグループ学習など応用可能であり、大いに参考になった。
- 現在担当している業務では研修内容を取り入れられておりませんが、今後機会があればぜひ実践していきたいと思います。また、１つの教育機関と企業だけでなく、県内（市内）の複数の教育機関と地元企業でプロジェクトを組み、県（市）全体で若者の育成に取り組む事業についても研修～実現までできれば良いと思います。
- FD/SD 研修に参加して、教職協働のあり方についての参考とさせていただこうと感じました。具体の実践には至っておりませんが、以前在職した大学の事務と異なる教職協働を意識した業務対応を実施していくつもりです。

＜感想や全体に対する意見＞

- 本学職員が多く参加をして頂きたい内容である。
- 職員の役割は、主に授業環境の整備であるが、授業を実施する教員の意図を理解していなければ、より良い環境設計はできず、教職協働とは成り得ない。教学マネジメントをする上で、職員には、教員の方針を踏まえて学習システムを構築するための俯瞰する力が求められると感じた。
- 既に COC+受講後ではなく受講前にプレゼンに至るまでのプログラムで実践を行っており、その“シメ”として外部機関の活用をとって、参加させていただきました。プレゼンをどう仕上げていくのか、その寛容（ビフォー・アフター）を客観的に捉えさせたつもりです。発表者の多くの意見として見られたのが“クラウドファンディングの活用”でした。経験の少ない学生らしい意見発表でしたが、クラウドファンディングの成功例（率）、成立率を知らないで議論していたようです。また、クラウドファンディングで一時的に人を集めても本来課題の趣旨である“継続的な”活性化を見据えていた発表は殆どなかったです。しかし学生が、今度“社会の一員として”自分達の街を考えたのは、素晴らしいことだったかと思います。
- ディープ・アクティブラーニングを実現化するには、座学における現実的（具体的）な方法が問われていると思います。100 人以上を対象とする座学では、1 教員で対応することは大変困難であり、何らかのサポートスタッフの存在が不可欠と思っております。今後相方向型の教育方法論の実践的、教育の在り様の検討は不可欠と思います。
- ディープ・アクティブラーニング、地域・企業と連携したコーディネーター研修とも実践したい考えはあるが、これらを実践するためには教職員や企業の方の協力が要となる。この問題を解答することが課題である。
- この研修を終えて共感したのは、教職員の役割で「教員と職員（専門職員）の協働による教学マネジメント」が挙げられる。科目の設計において、教職員が共通認識を持つことでカリキュラム全体の授業運営が可能となる。また、カリキュラム設計では参画する企業を募り「大学が核となり人と地域・企業がともに育つ仕組みを創る」ことが重要となり、これより専門職員は教員が個々のカリキュラムを設定する中でコーディネーターとなり関わることで教職協働を促進する環境整備の手助けは可能と考える。
- 実践しようとすると、かなり難しい。
- ぜひ、実施したアンケートの結果をお示しいただくとまた参考になります。

- 現業務において、自ら実践する立場にないため、「３」の回答となっています。
- ディープ・アクティブラーニングの仕組みや取り組みの具体例をわかり易く紹介頂き、理解することができました。ありがとうございました。
- 取り入れた方がいいのかもしれないが、カリキュラムの実態上、現状以上のことは難しい。
- COC+関係の研修では、他大学の教職員や学生と意見交換ができ、当方もさまざまな知見が得られた。「２．の回答」であげた内容が該当する。今後も機会があれば、研修に参加したいと思う。
- とても有意義な研修でした。
- 取り入れているつもりだが、学生の主体的参加型の授業運営のむずかしさを感じている。地域社会の人材を活用して講義してもらうことは学生を刺激していい効果を生むのではないかと思われる。
- 現在のところ、業務の中で実践することが難しいが、機会があれば実践できたら良いと思っている。
- とても勉強になりました。これからどうぞお願い致します。
- とても分かり易く楽しい授業でした。COC+の方々にも大変お世話になりました。ありがとうございました。
- 商品案やネーミング案を考えアイデアを出す事はとても学生が興味感心をもってとりくめることと思う一方、かかえる課題を掘り下げ、ビジネスや地域の中でどう展開するかという深い所まできちんと考えていけるのかが少し疑問である。１科目では到底無理で、教育プログラムとして体系化され、つみ上げられた上で成り立つものと思う。

  ２回受講のチャンスを頂けて、講師の先生方に感謝申し上げたい。教授法を学ぶ大変貴重な機会であった。
- 協働により学生の学びが深まることは非常に効力を感じます。ただ限られた時間内にある程度の答えを導き出すには教員の進め方もあると思うので計画の重要性も感じています
- 今後の研修も楽しみにしております。ファシリテーションの技法やテーマ設定の方法、授業のマネジメントなどにも興味があります。
- 自分の授業にうまく取り入れられるかわかりませんが、昨年度の研修は非常におもしろく勉強になりました。

＜継続に関する意見＞

- 様々な課題を抱えている地域で、学生自身が地域の課題解決や地域活動の実践の場として学ぶことは、地域に気づきを促し、地域住民をはじめとする人材育成に資すると思われる。地域連携は、本学の社会的なプレゼンスを高めるためにも戦略的に、継続的に実施しなければと考えるところである。
- アンケートの結果を踏まえ、他の方の実践について参考にできる機会やさらに研修ができる機会を設定して頂ければ幸いです。
- アクティブラーニングの必要性は、学生の方からも出てきている状況です。研修等で事例などを紹介していただけることがとても役に立っています。お礼と共に、引き続き事例など紹介していただけると助かります。
- 出来るだけ多くの職員が機会があればこのような研修に参加し、理解や関心を深めてもらえると有難い。
- 一連の研修でご提案いただいた「ディープ・アクティブ・ラーニング」等の手法はこれからの高等教育機関において、なくてはならないものだと思います。今後も、ご教示の程を切に願っております。

Ⅱ. これまでの養成状況

養成研修終了後のアンケート調査の回答状況

１．アンケート票回収状況（N=468）

- 提出 ..... 401 票（86%）
- 未提出 ..... 67 票（14%）

実提出者数　　277 名

２．研修会を受ける前と比較して、「COC+事業」「ディープ・アクティブラーニング」について理解が深まりましたか。（N=277）

- 大変理解が深まった・やや理解が深まった ..... 178 名（64%）
- どちらとも言えない・あまり理解が深まらなかった・
  全く理解が深まらなかった ..... 24 名（ 9%）
- 無回答 ..... 75 名（27%）

３．研修会の内容を、ご自身の業務に取り入れたい（実践したい）と考えますか。（N=277）

- 取り入れたい・実践したい ..... 11 名（ 4%）
- 課題をクリアできれば取り入れたい・実践したい ..... 140 名（51%）
- どちらとも言えない・取り入れられない・実践できない ..... 51 名（18%）
- 無回答 ..... 75 名（27%）

Ⅲ. 大学・短期大学・高等専門学校別状況

	事業周知研修	研修後アンケート回答（のべ数）	**「導入」レベルで認定**	実践状況調査対象	実践状況調査回答	**「実践」レベルで認定（今後実践予定）**
東北学院大学	約 550	18（40）	**17**	15	14	**2（9）**
宮城教育大学	38	5（7）	**4**	3	3	**0（3）**
東北工業大学	（全教員に毎月教授会で報告）	96（131）	**56**	41	32	**6（19）**
石巻専修大学	63	2（2）	**1**	1	1	**0（1）**
尚絅学院大学	約 60	61（72）	**36**	28	13	**4（5）**
仙台大学	約 30	6（8）	**6**	5	5	**1（2）**
仙台白百合女子大学	約 150	6（9）	**6**	4	4	**1（2）**
東北生活文化大学	99	11（15）	**8**	10	9	**3（4）**
宮城学院女子大学	約 120	24（34）	**13**	12	11	**3（4）**
聖和学園短期大学	26	37（69）	**22**	24	14	**3（7）**
東北生活文化大学短期大学部	（大学と合同）	6（6）	**5**	3	3	**0（3）**
仙台高等専門学校	8	5（8）	**4**	5	5	**1（3）**
計	約 1,150	277（401）	**178**	151	114	**24（62）**

以　上

別 添 2

【提出期限：2018 年 10 月 26 日（金）15 時】

●●大学　　●●　●●　様

「みやぎ・せんだい協働教育基盤による地域高度人材の育成」事業の実施に係る
FD/SD 研修受講者を対象とした実践状況調査
【調査票】

COC+事業 FD/SD 部会では、FD/SD 研修の効果検証を目的として、研修受講者に対し研修終了時にアンケート調査を実施しています。今回の実践状況調査は、更なる研修の効果を確認することを目的に、これまで COC+事業の FD/SD 研修を受講し、かつ研修内容の実践の希望者が、その後に自らの講義や業務等において研修内容を実践したのか、具体的にはどのようなことを実践したのかを把握するものです。

つきましては、裏面の質問にご回答いただき、提出期限までに各機関窓口にお渡しくださいますようお願い申し上げます。

●●　●●　様　が参加した COC+事業 FD/SD 研修及び回答内容

研修 NO.	開催日時	テーマ	「本日の研修内容をご自身の業務に取り入れたい（実践したい）と考えますか」に対するご回答
9	2018 年 7 月 24 日	大学と地域・企業をつなぐ連携の意味と可能性	1 取り入れたい・実践したい

実施状況調査アンケート

1. COC+事業 FD/SD 研修受講後に、研修で得た内容を、授業や業務等に取り入れ（実践し）ましたか。
   - ☐ 取り入れた・実践した
   - ☐ まだ取り入れて（実践して）いないが、後期から来年度に向けて取り入れたい・実践したい
   - ☐ 今後、取り入れる（実践する）予定はない

2. 上の質問で「取り入れた・実践した」と回答された方に伺います。具体的には、どのような事柄で、どのような内容を取り入れ（実践し）ましたか。※複数回に参加された方は必ず「研修 No.」をご記入ください。

例：研修 No.7のディープ・アクティブラーニングの考え方を授業に取り入れ、形成的評価を実施した

3. その他ご意見等あれば記入してください。

ご協力ありがとうございました

※アンケートの回答は「個人情報保護方針」（http://miyagi-coc.jp/privacy）に従い適切に取り扱います。

［調査担当者］
地域協働教育推進機構
FD/SD 部会担当 高橋、千葉
〒980-8511 仙台市青葉区土樋 1-3-1
Tel 022-264-6328
E-Mail jimu@miyagi-coc.jp

●●●●年度 COC+事業　FD/SD 研修アンケート

アンケートの回答は記入者を特定しない形で集計し今後の取り組みに活かしてまいります。入力された個人情報は「個人情報保護方針」（http://miyagi-coc.jp/privacy）に従い適切に取り扱います。また、個人情報は本事業の運営等に関する連絡の目的に限って利用し、厳重に管理いたします。

記入者氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　　所属　●●●●（ 教員 ・ 職員 ）

１．本日の FD/SD 研修の開催を何で知りましたか。

- □ 学内の教授会や会議等の全体共有によって
- □ メールや個人宛の配布物によって
- □ 他の教職員から個人的に勧められて
- □ その他（　　）

２．本日の FD/SD 研修についてどのように感じましたか。

- □ 参加して良かった
- □ 普通
- □ 得るものが無かった

３．上の２を選んだ理由をお知らせください。

４．「学生の主体的な学びのためのカリキュラム設計と授業運営」について理解が深まりましたか。

- □ 大変理解が深まった
- □ やや理解が深まった
- □ どちらとも言えない
- □ あまり理解が深まらなかった
- □ 全く理解が深まらなかった

５．本日の FD/SD 研修（COC+事業の進捗報告と今後の計画について）の内容のうち、ご自身の業務に関連する項目、またはご自身の業務に活用できる項目を教えてください。

６．本日の FD/SD 研修の内容を、ご自身の業務に取り入れたい（実践したい）と考えますか。

- □ 取り入れたい・実践したい
- □ 課題をクリアできれば取り入れたい・実践したい
- □ どちらとも言えない
- □ 取り入れられない・実践できない

７．本日の FD/SD 研修の内容を取り入れる（実践する）ときに課題となりそうなことや懸念事項があれば、教えてください。

８．その他、本日のご意見や感想があれば記入してください。

ご協力をありがとうございました

別添３

COC+事業 FD／SD 研修一覧（2018 年度まで）

No.	研修名称	開催日時	会場	テーマ	参加人数
0	事業周知 FD/SD 研修	2016 年度以降 随時(計 16 回)	各機関	事業内容の説明	事業協働機関 教職員約 1,150 名
1	養成研修	2017 年2月 28 日(火) 10:00-12:00	聖和学園 短期大学	地域企業と連携した教育プログラムの設計	事業協働機関 教職員 33 名
2	養成研修 (入門編)	2017 年7月 28 日(金) 14:40-17:10	宮城学院 女子大学	PBL・企業連携プログラムの開発	事業協働機関 教職員 35 名
3	FD/SD 研修	2017 年８月８日(火) 10:00-12:00	尚絅学院 大学	学生の主体的な学びを促進するためにはーCOC+事業の活用を例としてー	尚絅学院大学 教員 55 名
4	養成研修 (実践編)	2017 年9月6日(水)・7日(木)	東北学院 大学	地域企業を題材とした課題解決の手法	事業協働機関 教職員 21 名
5	ハンズオン型研修	2017 年度を中心に 随時(のべ 38 回)	各機関	各正課科目にあわせてテーマを設定	科目担当教員11名、 参観者 93 名
6	FD/SD 研修	2017年11月28日(火) 15:00-16:30	聖和学園 短期大学	学生の主体的な学びのためのカリキュラム設計と授業運営 -COC+を例にして-	聖和学園短期大学 教職員 30 名
7	FD/SD 研修	2018 年６月１日(金) 15:00-15:50	東北工業 大学	ディープ・アクティブラーニングのすすめ	東北工業大学 教職員 66 名
8	養成研修	2018 年7月 13 日(金) 15:30-17:00	東北学院 大学	教学マネジメントと職員の役割	事業協働機関 教職員 20 名
9	養成研修	2018 年7月 24 日(火) 15:30-17:00	東北学院 大学	大学と地域・企業をつなぐ連携の意味と可能性	事業協働機関 教職員 14 名
10	養成研修	2018 年7月 31 日(火) 15:30-17:00	東北工業 大学	地域・企業と連携した コーディネーター養成研修の設計と運用	事業協働機関 教職員 65 名
11	養成研修	2018 年８月６日(月) 15:30-17:00	東北学院 大学	「地域の課題Ⅰ」プログラムの開発と運用①設計・運営	事業協働機関 教職員 6名
12	養成研修	2018 年8月 20-22 日 (月-水)終日	東北学院 大学 他	「地域の課題Ⅰ」プログラムの開発と運用②聴講	事業協働機関 教職員 14 名
13	養成研修	2018 年8月 30 日(木) 15:30-17:00	東北学院 大学	「地域の課題Ⅰ」プログラムの開発と運用③評価・ふりかえり	事業協働機関 教職員 5名
計　13 研修（のべ 50 回） ※NO. 0 事業周知 FD/SD 研修は除く					468 名